『正法眼蔵』と漢籍仏典との構文表現の比較

――『如浄禅師語録』・他の語録との比較・検証を通じて――

藤川直子

はじめに

道元禅師（一二〇〇―一二五三）の主著である仮字『正法眼蔵』（以下、『正法眼蔵』とのみ記す）について、管見では従来、比較的焦点が当てられてこなかったと思われる構文の分析により、その特徴を明らかにする検証をこれまで試みてきた。まず始めに、『正法眼蔵』本文そのものの検証を実施し[1]、続いて同時代の和文による仏典の検証を行ない、二〇二一年度の印度学仏教学会学術大会において、「『正法眼蔵』構文表現の特徴―他の和文文献との比較・検証を通して―」という表題で、『正法眼蔵』が、複文を多用していること、中でも「言い換えによる複文」を使っていることを指摘した。本論文では、道元禅師が留学していた宋時代を中心とした漢籍仏典（語録）を中心に、それらの構文の構成と比較して、『正法眼蔵』の構文の特徴を検証することとした。

具体的な内容としては、道元禅師の師である天童如浄（一一六二～一二二七）の『如浄禅師語録』および、道元禅師が古仏と尊称する宏智正覚（一〇九一～一一五七）の『宏智禅師広録』ほか、『景徳伝灯録』から代表的な禅師の語録を選び、これらの文章と比較することによって、和文と漢文との表現方法の違い等、より広汎な観点から『正法眼蔵』の構文を客観的に分析することとする。

一　『如浄禅師語録』の構文分析

『如浄禅師語録』[2]は道元禅師の帰朝後、如浄禅師が寂滅した後に中国に残っていた弟子たちが編纂したものである。如浄が住持を勤めていた「清涼寺」（一二一〇～一二一五）・「台州瑞岩寺」（一二一五～一二一六）・「臨安浄慈寺」（一回目一二一六～一二二〇と二回目一二二三～一二二四）・「明州瑞岩寺」（一二二二～一二二三）・「天童山景徳寺」（一二二四～一二二六）

での上堂、ならびに小参・法語・頌古などが収められており、上下二巻からなっている。

ちなみに、これらの寺院は、天童山景徳寺および浄慈寺が禅宗五山第三と第四に列せられている。

最初に、これまで検証してきた『正法眼蔵』と、同時代の和文による仏教典籍である『禅家説』・『開目抄』と同様[3]に、『如浄禅師語録』の構文を分類してみたい。なお、構文の分類については、拙稿「『正法眼蔵』の言語表現に関する一考察[4]」を参照されたい。

下表の分類結果から、明らかなことは、

㈠　肯定的複文と単文の使用頻度が高いということ（合計で全体の八割以上）

㈡　否定的複文と疑問・反語的複文および禁止・命令的複文の使用が少ないこと

㈢　言い換えによる複文が無いこと

などが挙げられる。従って、文章の構文としての特徴は、比較的平易な構文が多いということになる。

続いて、『如浄禅師語録』から実際に具体例を引用してみる。なお、引用は『大正新脩大蔵経』第四十八巻からで、上堂の実施寺院は清涼寺を「清」、台州瑞岩寺を「台瑞」、浄慈寺一回目をを「浄」、浄慈寺二回目を「再浄」、明州瑞岩寺を「明瑞」、天童山景徳寺を「天」と略記し、大正蔵の頁数と段の表記も併せて記載する。（なお、〈〉内に筆者による書き下し文を、（）内に同様に直訳（試訳）を記す。）

『如浄禅師語録』「上堂」— 構文分類表

寺院名	肯定的複文	否定的複文	疑問・反語的複文	禁止・命令的複文	展開的複文	言い換え	小計	単文	合計
清涼寺	126	3	1		37		167	88	255
台州瑞岩禅寺	26				12		38	29	67
浄慈禅寺	147	3	1	1	48		200	111	311
明州瑞岩寺	30		1		8		39	19	58
再住浄慈禅寺	60				34		94	44	138
明州天童景徳寺	100	2	1		47		150	80	230
小計	489	8	4	1	186	0	688	371	1059
(%)	*46.2%*	*0.8%*	*0.4%*	*0.1%*	*17.6%*	*0.0%*	*65.0%*	*35.0%*	*100.0%*

㈠ 肯定的複文

（截斷程途驀直來。）乾坤洞徹此門開。（「清」『大正蔵』第四八巻、一二一頁・下段）

〈程途を裁断し驀直に来たる。）乾坤は洞徹して此の門、開けたり。〉

（〈程途を裁断して真っ直ぐに来たならば、）天地は突き通ってしまい、この門が開けた。）

打破黒漆桶。十方空豁豁。（「台瑞」、一二三頁・中段）

〈黒漆桶を打破して、十方空は豁豁たり。〉

（黒い漆桶を打ち破って、十方の空は明瞭である。）

浄慈借詩説教。要與衲僧點眼。（「浄」、一二四頁・中段）

〈浄慈は、詩を借りて教を説き、衲僧のために点眼せんと要す。〉
（浄慈（わたし如浄）は、（杜甫の）詩を借りて教えを説き、大衆（雲水達）のために明眼を開かせたいと望む。）
擧拂子云。法幢已建。宗旨已立。（「明瑞」、一二五頁・下段）
〈払子を挙げて云う、法幢すでに建て、宗旨すでに立てり。〉
（払子を挙げて云うには、法の幢はすでに建てていて、宗旨もすでに立てた、と。）
依稀寒水玉。彷彿冷秋菰。脩竹芭蕉入畫圖。（「再浄」、一二六頁・下段）
〈依稀す寒水の玉、彷彿たり冷秋の菰、脩竹芭蕉画図に入る。〉
（冷たい水晶玉に似ていて、冷秋の菰にも似通っていて、脩竹や芭蕉が画図に収まっているようだ。）
進院得住便住。退院要行便行。（「天」、一二八頁・中段）
〈進院、住を得れば便ち住し、退院、行かんと要すれば便ち行く。〉
（進院して住持となれば即ち寺に住み、退院して寺を退くべきとなれば即ち退く。）

㈡ 否定的複文

其或未然。竹根稚子無人見。（「清」、一二三頁・上段）
〈其れ或し未だ然らずんば、竹根の稚子、人の見ること無し。〉
（其れもし未だそうでないならば、竹の根元にいる雉の子は、人から見えない。）
不曾生不曾死。（「浄」、一二四頁・上段）
〈曽て生ぜず、曽て死せず。〉
（（世尊は）かつて生まれてこないし、未だかつて死んでもいない。）
清不可誇。香不可誇。（「天」、一二八頁・上段）
〈清誇るべからず、香誇るべからず。〉
（清きを誇ることなく、香りを誇ることもない。）

㈢ 疑問的・反語的複文

喚不回頭。爭奈何。（「清」、一二三頁・中段）
〈喚べど頭を回らさず、争奈何せん。〉
（（飛んでいる燕子を）喚んでも頭を回らさない、どうしようか。）
是祖意是教意。（「浄」、一二五頁・中段）
〈（且く道え。）是れ祖意や是れ教意や。〉
（（さあ言いなさい。）是れは祖意であるか教の意であるか。）
僧問古德。深山嵒崖中。還有佛法也無。（「明瑞」、一二五頁・

下段）
〈僧古徳に問う、深山嵒崖の中、還た仏法有り也無しや。〉
（僧が古徳に問うた、深山の断崖の中に、仏法が有るか無いか、と。）

㈣ 禁止的・命令的複文

看看。機先箇箇英靈漢。（「浄」、一二三頁・下段）
〈看よ看よ、機先の箇箇、英霊の漢。〉
（看なさい看なさい、兆しの前に（道理の分かる）それぞれ、優れた人達を。）

㈤ 展開的複文

三聖道。逢人則便出。出則不爲人。（「清」、一二一頁・下段～一二二頁・上段）
〈三聖道く、人に逢えば則便ち出ず、出でては則ち人の為にせず。〉
（三聖が云うには、人（道を求める人）に逢えば即ち出て行き、出た後は則ち、人の為になさない、と。）
其或未然。誰在畫樓沽酒處。相邀來喫趙州茶。（「台瑞」、一二三頁・中段）
〈其れ或し未だ然らずんば、誰が画桜沽酒の處ろに在りて、相い邀え来りて趙州の茶を喫せん。〉
（それがもしそうでなかったならば、誰が美しい高楼や酒店（旅館）の所にいて、一緒に迎えに来て趙州の茶を飲むだろうか。）
若不得流水。還應過別山。（「浄」、一二五頁・上段）
〈若し流水を得ざれば、還た応に別山を過ぐべし。〉
（もし（正しい）流れの水を得ることができなければ、また正に別の山に行って（亜流に陥って）しまうだろう。）
又卓云。深固幽遠無人能到。（「明瑞」、一二五頁・下段）
〈又、卓てて云く、深固幽遠にして人の能く到ること無し。〉
（また、（拄杖を）立てて云った、深く幽遠で、人が能く到れる（境界）ではない、と。）
進一歩則有象。退一歩則無蹤。（「再浄」、一二六頁・下段）
〈一歩進めば則ち象有り、一歩退けば則ち跡無し。〉
（（払子は百尺の竿の頂きである）一歩進めば形象が現れ、一歩退けば形象の跡形がない。）
呈起云。看彩鳳嗍出。（「天」、一二七頁・上段）
〈呈起して云く、看よ、彩鳳が嗍んで出た。〉
（（勅黄を）呈起して云う、看なさい、美しい鳳が銜えて出てきた、と。）

㈥ 言い換えによる複文

該当構文　なし

(七)単文

請首座上堂。(「清」、一二二頁・上段)
〈首座を請する上堂。〉
(首座を要請する上堂。)
晝夜方纔不可眠。(「台瑞」、一二三頁・中段)
〈昼夜、方に纔かも眠るべからず。〉
(昼も夜もまさにわずかも眠ってはならない。)
還委悉麼。(「浄」、一二三頁・下段)
〈還た委悉する麼。〉
(さて、分かって(理解して)いるか。)
黄金妙相。著衣喫飯。(「明瑞」、一二五頁・下段)
〈黄金の妙相、著衣喫飯なり。〉
(黄金の妙相(妙なる姿をした仏)とは、(雲水が)衣を着て飯を食べていること(日常のことそのもの)だ。)
浄慈屋裡門。浄慈屋裡開。(「再浄」、一二六頁・上段)
〈浄慈屋裡の門、浄慈屋裡に開く。〉
(浄慈寺の中の山門は、浄慈寺の内側に開いている。)
一齊都在畫圖中。(「天」、一二七頁・下段)
〈一斉都て画図の中に在り。〉
(一斉はすべて、画図の中に収まっている。)

以上、六種類の複文と単文の具体例を、分類別・寺院別に挙げてみた。そもそも、漢文を書き下し文として理解し、意味を考慮して和文と同様に分類すること自体の意義を勘案するべきとも言えるが、敢えて分類を施すことを試みた。例えば、漢文の文法的要素を反映すると、「不惑」ならば名詞的な扱いになるが、「惑わない」なら動詞と見做されることとなり、判断が極めて難しくなる。これらの判断については、卍山本系版本(参考文献の中野達慧編輯本)に施された返り点等々を参考に筆者が分類した結果である。また、如浄禅師は、漢詩にも長けているため、詩文に関しては、敢えて一句を一文章と見做した。これについては、まだ検討の余地が残っていると言えるが、七言絶句・五言絶句として詩の形態を取っているにも拘わらず韻を踏まずに散文として表現している文も散見されるため、韻を踏んで漢詩としての体裁を整えている文章では一句一文章にすることとした。この解釈については引き続き検討を加えていきたい。

二 『正法眼蔵』と『如浄禅師語録』の構文の比較

続いて、『如浄禅師語録』の中から『正法眼蔵』に引用されている構文を比較してみる。先ず、如浄が住持として最初に入山した住建康府清涼寺語録、臘八(十二月八日)上堂から、

臘八上堂。瞿曇打失眼睛時。雪裏梅花只一枝。而今到處成荊棘。却笑春風繚亂吹。(「清」、『大正蔵』四八巻、一二二頁・

下段～一二三頁・上段）

〈臘八上堂。瞿曇が眼睛を打失する時。雪裏に梅花は只一枝。而今、到る處に荊棘と成る。却って笑う、春風の繚亂として吹く。〉

（臘八（釈尊成道日）の上堂。釈尊が眼玉を打ち破る時（活眼を開いて得悟する時）。雪の中には梅の花がただ一枝のみある。今、至る所に茨と棘ばかりが成っている。春風に吹かれて咲き乱れる中で微笑んでいる。）

同じ内容の文章が『正法眼蔵』「梅華」の巻では、

先師古仏、上堂示衆云、瞿曇打失眼睛時、雪裏梅華只一枝、而今到処成荊棘、却笑春風繚乱吹。（大久保道舟編『道元禅師全集』上巻（以下『大久保本』と略す）・四五九頁、『本山版訂補正法眼蔵』（以下『本山版訂補』と略す）七〇六頁）[5]

と紹介しているが、如浄を指す「先師古仏」の言葉と「臘八上堂」に代えて「上堂示衆云（大衆（雲水達）に示して云う）」と記載している以外は全く同文であり、両者とも構文的には七言絶句の体裁であり、如浄禅師が四句として区切っているのに対して、道元禅師は四句を続けて肯定的複文と見做している。「瞿曇の眼睛を打失する時」について、道元禅師は同巻の中で続けて、「いま、この古佛の法輪を盡界の最極に轉ずる、一切人天の得道の時節なり」と述べ、眼睛打失の時が得道の時節であるとしていて、「雪裏の梅華只一枝」を「雪裏の梅華は、一現の曇華なり」といい、「而今の到る処は荊棘を成し」を「而今の到處は、山河大地なり」、「而今の現成かくのごとくなる、成荊棘といふ」と述べ、さらに「却って春風を笑い繚乱が吹く」を「天地國土も法輪に轉ぜられて活鱍鱍地なり」、「華開世界起の時節、すなはち春到なり」と述べて、結果として「梅華」が如来の眼睛だとしている（『大久保本』四五八～四六二頁、『本山版訂補』七〇六～七一一頁）。如浄の言葉を逐次完全に和文に置き換えている訳ではないが、随所で丁寧に和文の説明で補っていると言える。

次に、天童山景德寺での上堂では、

復擧記得。僧問百丈。如何是奇特事。百丈云。獨坐大雄峯。大衆不得動著。且教坐殺者漢。今日忽有人問淨上座。如何是奇特事。只向佗道。有甚奇特。畢竟如何。淨慈鉢盂。移過天童喫飯。（「天」、同、一二七頁・中段）

〈復た挙す。記得す、僧、百丈に問う、如何が是れ奇特の事。百丈云く、独坐大雄峯なり。大衆動著することを得ざれ。且く者の漢を坐殺せしめよ。今日忽ち人有りて淨上座に問う、如何が是れ奇特の事。只、佗に向って道う、甚の奇特か有らん。畢竟如何。淨慈の鉢盂、天童に移過して喫飯す。〉

（また取り上げた。覚えていることだが、僧が百丈に尋ねた、奇特のこととは何か、と。百丈は言った、独り大雄

峰に坐禅することだ、と。雲水達は惑わされてはならない。さあ、この漢は坐わらせたままにしておこう。今日、突然、人が浄上座に尋ねた、奇特のこととは何か、と。ただ彼に向って言おう、（何も）奇特など有るものか。結局どういうことか。浄慈の鉢盂が天童山に移って来て飯を喰う、ということだ。）

と、述べていて、道元禅師は、これに対して『正法眼蔵』「家常」の巻では、

先師古佛、示衆曰、記得、僧問百丈、如何是奇特事。百丈曰、獨坐大雄峯。大衆不得動著、且教坐殺者漢。今日忽有人問淨上座、如何是奇特事。只向他道、有甚奇特事。畢竟如何。淨慈鉢盂、移過天童喫飯。（『大久保本』四九九頁、『本山版訂補』七七一頁）

と紹介している。語句の違いは、前段同様に「先師古仏」の言葉等のほかに「有甚奇特」に「事」（‐‐で示す）が加筆されているが、「何も奇特などあるものか」に対して「何も奇特の事などあるものか」となり、内容的にも構文的にも違いはないと言える。続いて和文の説明では、

佛祖の家常に、かならず奇特事あり、いはゆる独坐大雄峰なり。いま坐殺者漢せしむるにあふとも、なほこれ奇特事なり。さらにかれよりも奇特なるあり、いはゆる浄慈鉢盂移過天童喫飯なり。奇特事は、條條面面みな喫飯なり。しかあれば、独坐大雄峰、すなはちこれ喫飯なり。鉢盂は喫飯用なり、喫飯用は鉢盂なり。このゆゑに、浄慈鉢盂なり、天童喫飯なり。飽了知飯あり、喫飯了飽あり、知了飽飯あり、飽了更喫飯あり。（同上、同上七七一～七七二頁）

と記している（波線は筆者）。

如浄の漢文では、「奇特の事」とは「独坐大雄峰」であり、「浄慈鉢盂移過天童喫飯」であると述べているが、道元禅師が語る奇特のこととは、一人する坐禅のことであり、それがすなわち鉢盂で喫飯することであるということに他ならない訳で、常々の当たり前のことである「茶碗で飯を喰う」が正に奇特のこと、優れたことだと説明している。このように、漢文では「体言止め」も含めた名詞句で単文として表現されることの多い構文を説明的な複文（右記の波線）で表現していると言える。

最後に、偈頌から

通身是口掛虚空。不管東西南北風。一等與渠談般若。滴丁東了滴丁東。（同、一三二頁・中段）

〈通身是れ口、虚空に掛く。東西南北の風に管ぜず。一等に渠の與（ため）に、般若を談ず。滴丁東了滴丁東。〉

（（風鈴は）これ全身が口となり虚空に掛っている。東西南北の風に関与しない。同様に彼のために般若を談ずる。滴丁東了滴丁東（チチン、トウレウ、チチントウ）。）

この文章は、『正法眼蔵』では、「摩訶般若波羅蜜」で引用さ

れている。

先師古仏云、渾身似口掛虚空、不問東西南北風、一等爲他談般若、滴丁東了滴丁東。

これ佛祖嫡嫡の談般若なり。渾身般若なり、渾佗般若なり、渾自般若なり、渾東西南北般若なり。（『大久保本』一二頁、『本山版訂補』一一頁）

と述べて、語句の差違は、「通身」が「渾身」となっており、「是」が「似」に「管」が「問」に、「與渠」が「為他」となっている。意味としては、例えば、「通」も「渾」も副詞としての意味は「全て」であり大差はないが、動詞の意味で考えると「通身」は「遮られることなく全身に」で「渾身」は「合わさって一体となった全身」となるため「身」を化和合と捉えて示していると考えることもできる。今回は構文としての分類検証に重点を置くため、それぞれの語句の意味としての違いが構文への影響を及ぼさない（副詞が副詞に、動詞が動詞に、接続詞が接続詞に（為は與と同じ用法でもある）、名詞が名詞に）ので構文としては同等と判断している。さらに、波線で示したように、風鈴は般若（智慧・虚空）を語っているのであり、「全身」で、「全他」で「全自」で、そして「全東西南北（＝尽界）の風に拘わらず」語っているのであり、般若が仏の、仏法の真理の現れであることを示していると思われる。従って道元禅師は、ここでも如浄禅師の偈頌への理解を促すために、言葉を換えて複文として繰り返し説明していると思われる。

三　その他の宋時代語録との構文の比較

前章で『如浄禅師語録』の中から『正法眼蔵』に引用されている語録を検証したように、宋時代の他の禅師の語録の中から道元禅師によって引用された構文をとりあげて比較・検証を加えてみる。

まず、『景徳伝燈録』では、大鑑慧能（六三八～七一三）の章から、

遇印宗法師於法性寺講涅槃經。師寓止廊廡間。暮夜風颺刹幡。聞二僧對論。一云幡動。一云風動。往復酬答未曾契理。師曰。可容俗流輒預高論否。直以風幡非動動自心耳。（『大正蔵』第五一巻、二三五頁・下段）

（印宗法師の法性寺に於いて涅槃経を講ずるに遇す。師、止廊廡間に寓する。暮夜、風が刹幡を颺げた。二僧の対論を聞く。一云く幡動ぜり。一云く風動ぜり。往復酬答して、未だ曽て理に契わず。師曰く、俗流が輒ち高論に預かるを容す可きや否や。直に風幡を以て動くに非ず、自らの心を動ずるのみ。）

（印宗法師の法性寺で涅槃経を講ずるのに遭遇した。師は止廊廡間に泊まっていた。暮夜、風が寺の幡を吹き上げた。二人の僧が対論するのを聞く。一人は幡が動いたと

云う。もう一人は風が動いたと云う。問答の応酬が続き、なかなか決着が着かない。師は俗人（私、慧能）がすみやかに高尚な議論に参加してよいかどうか、と（尋ねた）。すぐに風や幡が動くのではなく自身の心が動いているだけだ、と言った。）

これに対して、『正法眼蔵』では「恁麼」の巻で、

第三十三祖大鑑禅師、未剃髪のとき、廣州法性寺に宿するに、二僧ありて相論するに、一僧いはく、幡の動ずるなり。一僧いはく風の動ずるなり。かくのごとく相論往来して休歇せざるに、六祖いはく、風動にあらず、幡動にあらず、仁者心動なり。（『大久保本』一六五頁、『本山版訂補』二五六頁）

と記していて、『正法眼蔵』では波線の部分が一つの展開的複文であるのに対して、『景徳伝燈録』の慧能章では単文と複文に分割されている。

次に、鳥窠道林（七四一～八二四）の章から、

又問如何是佛法大意。師曰。諸悪莫作衆善奉行。白曰。三歳孩兒也解恁麼道。師曰。三歳孩兒雖道得。八十老人行不得。（『大正蔵』第五一巻、二三〇頁・中段）

〈又問う、如何が是れ仏法の大意。師曰く、諸悪莫作衆善奉行。白曰く、三歳孩兒、恁麼に解すれば道う。師曰く、三歳孩兒道得すと雖も、八十の老人も行ずるを得ず。〉

（又問うた、如何なるか是れ仏法の大意とは。師曰く、諸悪莫作、衆善奉行なり、と。白曰く、三歳の幼児でもそのように理解すれば道えるだろう。師曰く、三歳の幼児が道い得るとはいっても八十の老人でも行ずることは難しい、と。）

同様に『正法眼蔵』「諸悪莫作」の巻では、

ちなみに居易とふ、如何是仏法大意。道林いはく、諸悪莫作、衆善奉行。居易いはく、もし恁麼にてあらんは、三歳の孩児も道得ならん。道林いはく、三歳孩児縦道得、八十老翁行不得なり。（『大久保本』二八二頁、『本山版訂補』四三〇頁）

と記している。さらに続けて、白居易の詩仙としての才能を評価するものの仏道では初心であるために、「三歳の孩児も道得ならん」と発しているのだとする。道林の言葉に道元禅師は、さらに説明を加えて、

もし三歳の孩児をしらんものは、三世諸佛をもしるべし。いまだ三世諸佛をしらざらんもの、いかでか三歳の孩児をしらん。（『大久保本』二八三頁、『本山版訂補』四三二頁）

いふこころは、三歳の孩児に道得のことばあり、これをよくよく參究すべし。八十の老翁に行不得の道あり、よくよく功夫すべし。（『大久保本』二八四頁、『本山版訂補』四三三頁）

と述べて、「三歳孩兒雖道得。八十老人行不得。」の言葉について具体的な解説と共に、言葉を補って説明している。

続いて、宏智禅師の『宏智禅師広録』第二巻からは、

頌曰、一尺水一丈波。五百生前不奈何。不落不昧商量也。依前撞入葛藤窠。阿呵呵會也麼。〈若是爾灑灑落落。不妨我哆哆和和。神歌社舞自成曲。拍手其間唱哩囉。（『大正蔵』第四八巻、一九頁・上段）

〈頌曰く、一尺の水、一丈の波。五百生前、奈何せず。不落不昧は商量なり。依前として葛藤窠に撞入す。阿呵呵。会すやまた麼しや。若し是れ爾、灑灑落落すれば。我が哆哆和和を妨げず。神歌社舞、自ら曲を成す。拍手、其の間に哩囉と唱う。〉

（頌に曰うところでは、一尺の水、一丈の波。五百生より前は、いかんともできない。不落不昧は商量（分別）である。依然として葛藤の巣穴に入るだけだ。阿呵呵（あはは）。分かったか、どうか。もし是れ汝が執らわれなければ、私は哆哆和和（たたわわ）というだけだ。神歌社舞を自ら曲を成し、拍手の其の間にリラと合いの手を唱う。）

これに対して、『正法眼蔵』「深信因果」の巻においては、

宏智古佛、かみの因果を頌古するにいはく、一尺水一丈波、五百生前不奈何。不落不昧商量也、依前撞入葛藤窠。何呵呵。會也麼。若是你灑灑落落、不妨我哆哆和和。神歌社舞自成曲、拍手其間唱哩囉。（『大久保本』六七九頁、『本山版訂補』一〇二七～一〇二八頁）

と同文を引用している。ここでは、七言絶句の第三句と第四句の「不落不昧商量也。依前撞入葛藤窠。」の部分を単文ではなく二文を繋げて複文としている。また、漢詩の部分（波線部）全体を道元禅師は単文の四文から意味を考えて直訳と同様に、展開的複文と肯定的複文の二文にまとめていると言える。

四　『正法眼蔵』と『如浄禅師語録』との展開的複文および言い換えによる複文の比較

複文と単文の両者の差異は、これまで検証してきた通りであるが、具体的な内容の比較を行うために、それぞれの本文をさらにいく例か引用してみよう。これらは、両者の複文の中でも文章量が比較的多く、さらに、複雑な傾向―「展開的複文」に分類される、述語が肯定文と否定文などが混在しているもの―が強い文章を選んでいる。

『如浄禅師語録』の複文の中から選んでみると、

未免犯太平水草。破清涼田地。深栽荊棘遍布蒺藜。（「清」、『大正蔵』第四八巻一二一頁・下段）

〈未だ免れず、太平の水草を犯し、清涼の田地を破り、深く荊棘を栽え、遍く蒺藜を布くことを。〉

（未だ、太平の水草を犯し、清涼の田地を破り、深く荊棘を栽え、遍く蒺藜を布くことをやらずにすます訳にはいかない。）

とあり、これらは、述語に焦点を当ててみると、「否定＋肯定、肯定、肯定＋肯定」で構成されている。続いて、

雖然如是且道。垂手那邊一句。又作麼生。（「清」、同本一二二頁・下段）

〈然りと雖も是の如し、且く道え、手を那辺に垂れる一句、又、作麼生。〉

（そうではあるがこのようなものだ、ひとまず道ってみよ、（大衆に）救いの手を差し伸べて導く一句、さて、どういうものか。）

とあり、これらは、述語に焦点を当ててみると、「肯定＋肯定＋命令、肯定、疑問」で構成されている。

擧拂子云。大衆向者裡看。朗朗晴空呑八極。（「清」、同本一二三頁・上段）

〈払子を挙して云く、大衆は者裡に向かいて看よ、朗朗たる晴空、八極を呑む。〉

（払子を挙げて云う、大衆はこれに向かって看なさい、晴れ渡った青空が、四方八方を呑み尽くしている。）

とあり、これらは、「肯定＋肯定、肯定＋命令、肯定＋肯定」で構成されている。

正當恁麼且道。不立功勳一句。如何大家頭上添灰土。（「台瑞」、同本一二三頁・中段）

〈正當恁麼のとき且く道え、功勲を立せざる一句とは、如何ん。大家頭上に灰土を添える。〉

（正にこのようなとき、さあ道いなさい、功勲を立てない一句とは、どのようにすればいいのか。大家（知事）が頭の上に灰土を被ることだ。）

で、述語の構成は、「命令、否定、疑問、肯定」である。

以拂子打圓相云。看畫作一道神符。向鬼門上貼。（「浄」、同本一二四頁・上段）

〈払子以て円相を打して云く、看よ、一道の神符を画き作して、鬼門上に向かいて貼る。〉

（払子で円相を描いて云った、看なさい、一枚のお守り札を画いて作し、鬼門の上に向かって貼る。）

で、これらは、「肯定＋肯定、命令＋肯定＋肯定、肯定＋肯定」である。

忽有箇漢出來道。爭似春眠不覺曉。落花處處聞啼鳥。又且如何。（「浄」、同本一二四頁・中～下段）

〈忽ち箇の漢有りて出来して道う、争でか似ん春眠曉を覚えず、落花処々に啼鳥を聞かんには。又且く如何。〉

（突然、一人の男があって出て来て道った、どのように似ているのか春眠曉を覚えずと、落花が至る処に（あって）

鳥が啼くのを聞くというのでは、と。又、さあ、どうであるか。）

では、述語の構成は、「肯定＋肯定＋肯定、疑問＋否定、肯定＋疑問、疑問」である。

呈起云。看。衲僧頂戴奉行。鼻孔機先證據。（「再浄」、同本一二六頁・上段）

〈呈起して云く、看よ、衲僧は頂戴奉行し、鼻孔は機先に証拠す。〉

（呈示して云うには、看なさい、衲僧は頂戴し奉行して、鼻孔（本来の面目）は兆しに先じて明らかにする、と。）

では、述語の構成は、「肯定＋肯定、命令、肯定、肯定」である。

忽有人問天童多少衆。但向他道。（「天」、同本一二七頁・下段）

〈忽ち人有りて、天童に多少の衆かと問わば、但だ他に向かいて道う。〉

（突然、人があって、天童に多少（どのくらい）の衆かと尋ねたならば、但だ彼に向かって答えよう。）

では、述語の構成は、「肯定、疑問、肯定＋肯定」である。

以拂子作彎橋勢云。看。依稀金磴闊。彷彿彩虹彎。（「天」、同本一二八頁・上段）

〈払子を以て彎橋（わんきょう）の勢を作して云く、看よ、金磴の闊に依稀たり、彩虹の彎に彷彿たり。〉

（払子で弓なりに曲った橋の様子を作って云うには、看なさい、金磴（石橋）の闊に似ているようで、彩虹の弓なりにも似ている、と。）

では、述語の構成は、「肯定＋肯定、命令、肯定、肯定」となっている。

以上の通り、展開的複文において比較的複雑な文章を選んでみたが、これらの文章は、述語が「肯定」、「否定」、「疑問」、「命令」が数種類ずつ混在した複文である。

対して、『正法眼蔵』では、

いふところは、佛法はいかにあることともしらず、さきより聞取するにあらざれば、したふにあらず、ねがふにあらざれども、聞法するに恩をかろくし身をわするるは、有智の身心すでに自己にあらざるがゆゑに、しかあらしむるなり、これを即能信解といふ。（「恁麼」、『大久保本』一六六～一六七頁、『本山版訂補』二五八頁）

これは、「肯定、肯定＋否定、肯定＋否定、肯定＋否定、肯定、肯定、肯定＋肯定、否定、肯定、肯定」で構成されおり、次では

しかあるに、不聞佛法の愚癡のたぐひおもはくは、われは大比丘なり、年少の得法を拜すべからず、われは久修練行なり、得法の晩學を拜すべからず、われは師號に署せり、師號なきを拜すべからず、われは法務司なり、得法の餘僧

を拜すべからず、われは僧正司なり、得法の俗男俗女を拜すべからず、われは三賢十聖なり、得法せりとも比丘尼等を禮拜すべからず、われは帝胤なり、得法なりとも臣家相門を拜すべからず、といふ。（「礼拜得髓」、『大久保本』二四七頁、『本山版訂補』三七九頁）

この文章は、「肯定、肯定、否定、肯定、否定、肯定、否定＋否定、肯定、否定、肯定、否定、肯定、否定、肯定＋否定、肯定、肯定＋否定、肯定」となる。次に

しかあるに、一類の狗子あり、尊宿のほとりに法語・頂相等を懇請して、かくしたくはふることあまたあるに、晩年におよむで、官家に陪錢し一院を討得して住持職に補するときは、法語・頂相の師に嗣法せず、當代の名譽のともがら、あるいは王臣に親附なる長老等に嗣法するときは、得法をとはず、名譽をむさぼるのみなり。（「嗣書」、『大久保本』三四一頁、『本山版訂補』五一七～五一八頁）

では、「肯定、肯定、肯定＋肯定＋肯定、肯定、肯定＋肯定＋肯定、否定、肯定＋肯定、否定、肯定」となり、

しかあればしるべし、佛法の正命を正命とせる祖師は、五宗の家門あるとかつていはざるなり。（「仏道」、『大久保本』三八二頁、『本山版訂補』五九〇頁）

では、「命令、肯定、肯定＋否定」の構成で、

説法は佛祖の理しきたるとのみ參學することなかれ、佛祖は説法に理せられきたるなり。（「無情説法」、『大久保本』三九七頁、『本山版訂補』六一四頁）

では、「肯定＋肯定＋禁止、肯定」となる。

杜撰にむかふていふべし、なんじがいふがごとく、佛經もしなげすつべくは、佛心もなげすつべし、佛身もなげすつべし、佛身心なげすつべくは、佛子なげすつべし、佛子なげすつべくは、佛道なげすつべし、佛道なげすつべくは、祖道なげすてざらんや、佛道・祖道ともになげすてば、一枚の禿子の百姓ならん、たれかなんぢの喫棒の分なしといはん、ただ王臣の驅使のみにあらず、閻老のせめあるべし。（「仏経」、『大久保本』四一二頁、『本山版訂補』六三八頁）

では、「肯定＋肯定、肯定、肯定、肯定、肯定、肯定、肯定、肯定、肯定、疑問、肯定、肯定、否定＋疑問、否定、肯定」となり、続いて次の例では、

いまの無聞のともがらは、阿羅漢はいかなりともしらず、佛はいかなりともしらざるがゆゑに、みづから阿羅漢にあらず、佛にあらずともしらず、みだりにわれは佛なりとのみおもひいふは、おほきなるあやまりなり、ふかきとがなるべし。（「四禅比丘」、『大久保本』七〇六頁、『本山版訂補』一〇六八頁）

では、「肯定＋否定、肯定＋否定、否定、否定＋否定、肯定＋肯定＋肯定、肯定＋肯定、肯定＋肯定」となる。

以上の比較から、先ず『如浄禅師語録』では、展開的な複文が多く見られることがわかる。また、『正法眼蔵』と同時代の和文として検証した『禅家説』および『開目抄』では、展開的な複文が多く見られたとはいえ、これら複文の内容をさらに細かく検証してみると、「肯定」と「否定」から構成された複文が中心であり[6]、「疑問」・「反語」、あるいは「命令」・「禁止」に類する述語を含む展開的複文は少なく一割あまりである。『如浄禅師語録』では、「肯定」や「否定」だけでなく、「命令」や「疑問」も度々記載されていることから、展開的複文としては複雑であると言える。ただ、分類表からも明らかなように「言い換え」による複文は見当たらない。従って、『正法眼蔵』の複文は様々な種類の複文が見られること、中でも大きな相違点は「言い換えによる複文」を用いている点が注目すべき特徴であると言える。具体的には、『印度学仏教学会研究』（七〇号）での拙稿で挙げた左記の①および②のほかにも、いくつか引用してみると以下の通りである。

①初心の坐禅は最初の坐禅なり、最初の坐禅は最初の坐佛なり。（「坐禅箴」、『大久保本』九四頁、『本山版訂補』一五一～一五二頁）

②心みなこれ衆生なり、衆生みなこれ有佛性なり。（「仏性」、『大久保本』二七頁、『本山版訂補』三四頁）

③佛有は趙州有なり、趙州有は狗子有なり、狗子有は佛性有なり。（「仏性」、『大久保本』三二頁、『本山版訂補』四一頁）

④法なるゆゑに客塵にあらず、客塵にあらざるゆゑに不染汚なり。（「海印三昧」、『大久保本』一〇三頁、『本山版訂補』一六四～一六五頁）

⑤この衆生は我此九部法の隨順なり、この隨順は、隨佗去なり、隨自去なり、隨衆去なり、隨生去なり、隨我去なり、隨此去なり。（「仏教」、『大久保本』三一三～三一四頁、『本山版訂補』四七七頁）

これらの具体的な言い換えによる複文というのは、例えば「A＝Bであり、B＝Cである」、「A＝Bであり、Cであり、Dである」、あるいは否定的に「AはBではないし、Cでもない」というように、言葉を言い換えていくことによって、自身に合致した「B」や「C」・「D」として受用できることとなり、イメージ化つまり概念化の受用をし易くしていると思われる。仮に「A＝B」と断言されると、「B」に関する知識や経験がなければ理解を難しくさせるが、「C」であり、あるいは、「D」であると認識できれば、より多くの理解を生むことが可能となるはずである。

これに比べて、『如浄禅師語録』での言い換えによる複文が無いことから、言い換えによる複文によって弟子達への理解を促すというべき概念化を進めるという考えはなかったと言えるのではないだろうか。このことは、如浄禅師にとって道元禅師

が既に法嗣として託せるレベルに達していたためとも考えられるが、浄慈寺の清禅師を讃える上堂で「滅盡綱宗行正令〈綱宗を滅尽して正令を行ず〉」（「浄」、『大正蔵』一二四頁・中段）と述べている通り、「行」に重きを置いていた結果にも拠ると言える。

五　小結

『正法眼蔵』における構文の特徴を検証するために、宋時代の語録である『如浄禅師語録』を中心として、『景徳伝燈録』および『宏智禅師広録』からいくつかの具体的な例文を挙げて比較し、複文の多用に関して再確認を行った。そこから明らかになったことは、漢文による語録を道元禅師は和文に置き換え、大衆に分かりやすく理解させるために様々な言葉を駆使して、説明を加えていることである。

複文の多用は、第一に言葉の固定化を避けること、第二に概念化を促すこと、第三にこの両者により異なる個別の理解度に応じた教義の伝達を可能とさせることであると拙稿（『印度学仏教学研究』第六九号）で述べた。

また、二〇二一年の印度学仏教学会でも発表した通り、個別の概念化は受用範囲が広いという利点がある反面、受動的な修学を否定していると言えるのではないだろうか。なぜなら、一人一人の内部での概念化は受身では決して収束できず、能動的に自身が造り出すイメージとの対峙を余儀なくさせるからである。「A」は「B」であると断定的に言われれば、これを受け容れるしか道はないが、「AはBであり、Cである」と言われれば自らの「B」や「C」と照らし合わせるという能動的な態度が必要となる。これを、厳密に実行しようとすれば、毎回、毎時取り組んでいくことにより、積極的に全身心で向き合うことが必要となる。これは、非常に厳しい状況に自らを置くこととなるはずである。まさに、百尺竿頭から、つねに一歩を歩み続けることであり、道元の修行そのものと合致すると考える。

今後は、仮字『正法眼蔵』全巻の構文分類を進めて、より客観的で確かな結論に到るべく研究を続けていきたい。

註：

（1）構文の種類については、拙稿「『正法眼蔵』の言語表現に関する一考察」（『駒澤大学仏教学部論集』第五一号、二〇二〇）を参照いただきたい。また、『正法眼蔵』の構文の検証に関しては、拙稿「『正法眼蔵』における複文表現の特徴に関する一考察」（『印度学仏教学研究』第六九号、二〇二〇）を、他の和文仏典の構文との比較・検証の結果に関しては、拙稿、「『正法眼蔵』における構文表現の特徴」（『印度学仏教学研究』第七〇号、二〇二一年一二月発行予定）を参照いただきたい。

（2）『如浄禅師語録』は『大正新修大蔵経』第四十八巻諸宗部五（一二一頁下段～一二八頁中段）を底本とした。これは、卍山本を底本としている。比較のために「総持寺本」に該当する鏡島元隆氏の『天童如浄禅師の研究』後篇訳註『如浄語録』（一九八三年、春秋社）の

引用漢文を参考とした。両者の違いは、上堂の順番、初句の違い、字の違い（例えば、闊（広大）と閣（建物）、誇（誇示する）と跨（乗越える））、同音異語（例えば、裡と裏など）等々が見られるが、本文の内容と構文構成に関して影響を及ぼす大きな違いは見受けられなかった。

（3）比較・参照のために、和文による三書の構文分類結果の表を以下に記載する。『正法眼蔵』については全巻の分析を進める前段階として代表的な「現成公案」・「仏性」・「諸悪莫作」・「三界唯心」と十二巻本の「深信因果」を含む五巻を選んで分析を試みている。また、『禅家説』からは和文による法語部分を、日蓮の著作については同じく和文で書かれている『開目抄』前段部分を分類している。

『正法眼蔵』ー「現成公案」・「仏性」・「諸悪莫作」・「三界唯心」・「深信因果」巻の構文分類表

構文の種類	肯定的複文	否定的複文	疑問・反語的複文	命令・禁止的複文	展開的複文	言い換え	複文小計	単　文	合　計
小　計	293	62	26	26	219	25	651	203	854
（%）	*34.3%*	*7.3%*	*3.0%*	*3.0%*	*25.6%*	*2.9%*	*76.2%*	*23.8%*	*100.0%*

『禅家説』ー「法語」の構文分類表

構文の種類	肯定的複文	否定的複文	疑問・反語的複文	命令・禁止的複文	展開的複文	言い換え	複文小計	単　文	合　計
件　数	117	4	6	0	82	0	209	35	244
（%）	*48.0%*	*1.6%*	*2.5%*	*0.0%*	*33.6%*	*0.0%*	*85.7%*	*14.3%*	*100.0%*

『開目抄』前段ー構文分類表

構文の種類	肯定的複文	否定的複文	疑問・反語的複文	命令・禁止的複文	展開的複文	言い換え	複文小計	単　文	合　計
件　数	195	8	26	0	118	1	348	113	461
（%）	*42.3%*	*1.7%*	*5.6%*	*0.0%*	*25.6%*	*0.2%*	*75.5%*	*24.5%*	*100.0%*

（4）拙稿「『正法眼蔵』の言語表現に関する一考察」（『駒澤大学仏教学部論集』第五一号、二〇二〇）

（5）句読点については、両本を参考にして筆者が付した。また、『大久保本』は会話を「　」で表記しているが、筆者の判断で省いている。

（6）『印度学仏教学会研究』第七〇号、二〇二一年一二月（発行予定）を参照。

〈参考文献〉

『大正新脩大藏経』第四八巻、第五一巻
『如浄禅師語録』上・下、武列江城書林、延宝八年
中野達慧編輯『天童如浄禅師語録』蔵経書院、一八八二
大久保道舟編『道元禅師全集』上巻、筑摩書房、一九六九
河村孝道・角田泰隆編『本山版訂補正法眼蔵』大法輪閣、二〇一九
鏡島元隆『天童如浄禅師の研究』春秋社、一九八三
拙稿「『正法眼蔵』における複文表現の特徴に関する一考察」『印度学仏教学研究』第六九巻第二号、二〇二〇
拙稿「『正法眼蔵』における構文表現の特徴―他の和文仏典との比較・検証を通して―」（『印度学仏教学研究』第七〇号）二〇二一（発行予定）
拙稿「『正法眼蔵』の言語表現に関する一考察」『駒澤大学仏教学部論集』第五一号、二〇二〇

〈キーワード〉『正法眼蔵』、『如浄禅師語録』、『宏智禪師広録』、『景徳伝燈録』、構文、複文、言い換え

（駒沢大学禅研究所研修員）